みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

“Science and Life” : Re-reading Vladimir Jochelson's Jesup Expedition Correspondence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ニコライ, ヴァフチン メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001195

谷本一之・井上紘一編『「渡鴉（ワタリガラス）のアーチ」（1903–2002）』
国立民族学博物館調査報告　82：157–181（2009）

「サイエンスとライフ」

ヴラヂーミル・ヨヘルソンのジェサップ調査通信を再読する

ニコライ・ヴァフチン

人の名前が有名であればあるほど，名前の背後にある人間性は看過される傾向がある。偉大な人物は人間でないとされ，少なくともその人間である度合いは，われわれ凡人よりも遥かに低いと考えられている。学術界における過去の著名人は，ひたすら学術に邁進して，人類の福利にかかわる知識の獲得という栄誉以外は決して追い求めず，同時代の政治・社会・経済環境からも超然としていた，と期待されている。われわれは，われわれ自身のみに，また時に自らの同僚だけには，その弱さを許容する。われわれには，弱みを持ち，自己中心的で気まぐれで，慎重さを欠くことが許され，また過ちを犯し，学術研究の欲求よりも自らの安楽を優先させることもありうる。だが，過去の大人物には，弱さを持つことが許されないのである。

とはいえ，これらの偉大なる人物も人間であった。この事実は，無論取るに足らぬものであったにせよ，われわれはそれをとかく忘れがちである。本稿では，上記の見解を裏付ける格好の素材と考えられるジェサップ北太平洋調査（JNPE）から，そのような一事例を紹介することを目的としている[1]。

本稿はある意味で，私が進める JNPE の歴史に関する研究[2] の続篇である。2001 年に上梓された拙稿を，私は以下のような 1 節で締め括っておいた。

> 調査の歴史それ自体ならびに同調査の成果刊行をめぐる，痛みを伴う長い物語は，日露戦争（1905），第 1 次世界大戦（1914–1918），3 次にわたるロシアの革命（1905 年の 1 次，1917 年の 2–3 次），米国とメキシコの戦争（1914–1918），大恐慌（1929），そして両国の歴史に生起したその他のドラマティックな出来事といった，20 世紀の最初の三分期に継起した壮観かつ壮大な出来事を背景として出来し，またそこには，これらの出来事が色濃い影を落としてもいた（Vakhtin 2001: 89）。

私がここで跡付けることを試みるのは，この歴史の絨毯に織り込まれた，ささやかなる 1 本の糸である。

本稿は，JNPE にかかわる主要人物であるフランツ・ボアズ（Franz Boas）と，彼の 3 人のロシア人同僚――ヴラヂーミル・ヨヘルソン（Vladimir Iokhel'son/Waldemar Jochelson），ヴラヂーミル・ボゴラス（Vladimir Bogoraz/Waldemar Bogoras），リェフ・シュテルンベルグ（Lev Shternberg/Leo Sternberg）――との間で交わされた通信[3] にもとづいて執筆される。同通信は，JNPE の実務的な歴史やイデオロギーの歴史の何れも，またそれとかかわるその他の出来事も，これを再構成する際には評価を絶する情報源となる。

本稿における私の目標は，JNPE の主人公のひとりであるヨヘルソンの，「JNPE 以降の」生活／人生（Life）を仔細に観察することにある。

3 人のロシア人のうちで，最低の経済状態にあったのは多分ヨヘルソンであろう。シュテルンベルグは比較的早く科学アカデミーの経歴に，したがってロシアでの生活にも，「賭け金」を投じていた。ロシアの学術界における彼の地位は，緩慢ながら着実に強化されていった。彼はサンクト・ペテルブルグの人類学民族学博物館（MAE，つまり著名なるクンストカメラ Kunstkamera）の創設者のひとりであり，学術論文を執筆し，北方諸民族学院とそこでの講義の創設にも参画していた。定評ある学者としての彼の立場は，ロシア革命の前後を通して頗る堅固に確立されていた[4]。

ボゴラスはその激しい気象に駆られて，より波乱万丈な生き方を選んだ。民族誌の執筆のほかに，彼は政治運動でも活発に行動し，10 年のシベリア流刑から戻ったのちも，反政府活動の廉で数回逮捕され，日刊紙や雑誌に記事を寄稿し，さらには大衆向けの小説も執筆し，公刊していた。北方委員会では高級委員を頗る活発に務め[5]，また北方諸民族学院の背後ではその主要な推進役を果たすなど，彼は 3 人のうちでも最大の公人であった。

ヨヘルソンは最も不安定な境遇にあった。JNPE から戻ったあと，彼の唯一の希望は，静かな場所を見付けて，フィールドワーク資料を整理し，学術論文や著書を執筆することにあったようである。彼にとっては，米国であれロシアであれ，スイスであれドイツであれ，また英国であれ，どこに住むかはどうでもよい問題であった。その書簡に幾度となく記すように，彼はどこへでも赴いて定住する用意があり，その関心事はほとんど専ら，彼自身と家族を支え，心静かに学術研究に専念することを保証するに足る俸給が，確保されるか否かという「条件」であった。

まずは，上記の陳述を裏付けるべく，一見して脈絡を欠いて不規則に展開された，1902 年から 1932 年までの 30 年に及ぶヨヘルソンの諸国遍歴を跡付けることを試みよう。

＊　＊　＊

1855 年に生まれたヨヘルソンは，かなり早い時期に「人民の意志」党の推進する革命運動に参加する。1871–1881 年には既に党活動家として活躍，1881 年には逮捕を免れるべくスイスへ亡命して，党の印刷所で働き，ロシア人学校で教鞭を執り，ベルン大学では 6 学期にわたって社会科学と経済学を学ぶ。1885 年，ロシアに帰国するも直ちに逮捕されて下獄。1885–1887 年を独房で過ごしたのち，1887 年には 10 年の刑期で東シベリアへ流刑となる。彼はそこで，彼の流刑地に住む少数部族ユカギールの民族学に興味を覚え，のちにはロシア帝室地理協会が組織したシビリャコフ調査に参加する。1898 年，ヨーロッパ・ロシアへ戻ったヨヘルソンは，直ちにスイスへ赴き，学業を修了するためベルン大学に復学する。だが，その目的は叶わず，彼は同年，JNPE への参加を打

診される[6]。ボアズは 1898 年 10 月 28 日，調査に参加する場合のヨヘルソンの雇用条件を明記した書簡を発送。雇用条件は以下の通り。

> 博物館はヨヘルソンを 3 年半，月額 100 ドルの報酬で雇用し，調査費用として総額 4,000 ドルを別途支給する。ヨヘルソンは 1899 年 2 月頃までにニューヨークへ到着，フィールドワークの特訓を受けたのち，同年の春のうちにオホーツク海北岸へ赴いてコリヤークの研究に従事すること。1899 年夏以降 1900 年晩冬に至るまでコリヤーク研究に専従したのちに，東ユカギールも訪ねること（Boas to Jochelson. October 28, 1898. AMNH–DA）。

1900 年 3 月，ジェサップ（Morris K. Jesup）とヨヘルソンはニューヨークで 1 通の公式契約書に署名した。同契約書によると，ヨヘルソンは JNPE 北東アジア斑の隊長に任命され，ヨヘルソン夫人（Dina Brodsky-Jochelson）を調査に同伴するとある。調査の目的は「北東アジアの民族学と生物学の調査」と明記されていた（Jesup to Jochelson. March 24, 1900. AMNH–DA. 詳細については Vakhtin 2001 を参照されたい）。

1901 年，ヨヘルソンは長期に及んだ，きわめて実り多いフィールドワークから帰還する。彼は今や，ユニークで評価を絶する民族学，形質人類学，言語学のデータや，その他の種類のデータを，10 年にわたる流刑時に行った観察と併せて所持することとなる。それは世界広しといえども，彼以外には誰も持ち合わせないような代物であった。このデータと，それらを公刊するための研究は，その後の 30 年の生涯を通じて彼の喜びと満足の源泉となったのみならず，きわめてしばしば唯一の，重要な収入源でもあった。

ヨヘルソン夫妻はシベリアから戻った直後に，AMNH にてボアズの指導下で彼らの資料を取り纏めるべく，ニューヨークへ赴く。以下は，ヨヘルソンがそこで過ごした数年間に記した，幾つかの手紙からの引用である。

> 私がニューヨークに着くや否や，彼らは私を搾取し始めました。9 時から 5 時まで博物館での激務をこなしたあと，家では別の仕事が私を待ち受けています……コリヤークのフォークロアと信仰から開始しました。……ボゴラスはチュクチの物質生活から始めています。……彼は既に 8 ヶ月もここで仕事をしています。彼は英語で執筆するのに，私はいまだにドイツ語での執筆ですが，1 年も経てば私も英語で書けるようになるでしょう。私たちの地位は恵まれていて，何れも博物館の助手を務めていますが，月給も 150 ドルに増えました。私たちのコレクションや資料は好評です。報道関係者がひっきりなしに訪れます。……（ロシアの）アカデミーからは博物館（Kunstkamera）の下級キュレーターのポストが提案されましたが，今は，どこに落ち着くべきか思案投げ首です。ロシアに住みたいとも思いますが，ここからも離れがたいのです。英語をマスターすれば，恐らく助教授のポストが与えられましょう[7]（Jochelson to Pekarskij. Dec. 17, 1902. RAS–J. From New York）。

あなたがアカデミーのポストについてお書きになっていること[8]は，私を全く動顛させませんでした。第1に，あなたがサンクト・ペテルブルグでおっしゃった条件は，全く受け入れられません。第2には，私がいつロシアに帰れるか，いまだ全く不明です。第3は，ラドロフの私に対する態度が全く好意的でないことです。……米国でポストを得るのは可能でしょうが，当面，ここに留まる気にはなれません（Jochelson to Sternberg. RAS–S. March 30, 1903. From New York）。

あなたは私をサンクト・ペテルブルグに招待してくださいます。私はとてもロシアへ参りたいのです。多分，この冬には行けるでしょう。……そちらでは生活が楽になったと書いておられますが，目下の「社会信頼」期が，さながらVa...vskyの「衷心からの配慮」の如く，いつ何時，終焉してしまいはせぬかと心配です[9]。ともあれ，冬は興味深いことをたくさんもたらすかも知れませんね（Jochelson to Sternberg. October 16, 1904. RAS–S. From Zurich）。

以上から明らかとなるのは，ヨヘルソンがその将来について定見が持てなかったこと，安定したポストが得られる場所を探していたこと，将来に関してさまざまなヴァージョンを「試して」いたこと，そして，どこに住んで何をなすべきか，を真剣に悩んでいたことである。

1905年，第1次ロシア革命が勃発する。この当時はスイスとドイツを頻繁に訪ねながらも，ほとんどいつもロンドンにいたヨヘルソンは，ユカギール資料を纏めることでAMNHからは恒常的に支払いを受けていた。彼はまたもや，どこに定住すべきかで迷っていた。

昨今のロシアの難局にも拘らず，そちらへ戻りたい衝動を覚えます。国外での暮らしには厭いて疲れてしまいましたが，どうしたらそちらに根を下ろすことが可能となるか，見当も付きません。ユカギール資料を纏めるなかでアメリカ（自然史）博物館とは一定の関係を堅持して，恐らくは別の調査に赴くことになるでしょう。けれども，暫くでもよいからロシアで暮らしたいものです（Jochelson to Pekarsky. April 3, 1906. RAS–J）。

1906年，ボアズは博物館との間で妥協が成立した事実を，以下のようにヨヘルソンへ伝えた。

あなたは7月1日以降2年間，本年度と同じ条件（つまり月俸150ドル――引用者注）で勤務を継続することが可能です。……この提案を受け入れることで，私は最善を尽くしてあなたの利益を守り，放っとけばそうするに相違ない博物館が，あなたを必要以上にこき使わぬようにできた，との感触を得てます（Boas to Jochelson. May 24, 1906. APS/NYPL）。

ヨヘルソンとは違って，第1次ロシア革命の数年間，公人として頗る活発に行動したボゴラスは，JNPE関連刊行物の一刻も早い完了を願っていたボアズを，恒常的に苛立たせ続けた。ヨヘルソンはボアズへ，ボゴラスの情況は何も知らぬものの，ボゴラスが

調査資料の取り纏めを続行することは，ここ当分なさそうだ，と伝えている。ヨヘルソンはさらに，ボゴラスは学術研究から期待できる以上の収入を文筆活動で得ているから，財政面は彼にとってさほど切実な問題ではない，とも記した。学術的関心と道徳的配慮のみが，フィールド資料取り纏めの継続へ向けてボゴラスを鼓舞しうるものの，作家やジャーナリストとしての解放運動への参加は，学術研究に比してより多くの充足感を彼に与えたのであった（Jochelson to Boas. August 23, 1906. APS/NYPL）[10]。

その間，国外に暮らすヨヘルソンはまたもや，ロシアへ戻るべきか否か，決めかねていた。

> 私たちはロシアから伝えられる近況をとても憂慮しています。4月にはサンクト・ペテルブルグへ行くことを予定していますが，至近の未来が何をもたらすか，誰にも判りません（Jochelson to Boas. January 31, 1905. AMNH–DA）。

ヨヘルソンが1906年に記した手紙は数通あるが，そこには，ロシアに戻るべきか否かをめぐって揺れ動く心の葛藤が見て取れる[11]。この葛藤は，それ以降の25年を通して，ヨヘルソンの人生の「ライトモチーフ」ともなる。

1907年2月，ヨヘルソン夫妻は，躊躇する思いを振り切ってサンクト・ペテルブルグに到着，アパートを見付けて落ち着いた。しかしながら，この祖国への「回帰」は長続きしなかった。1908年5月には既に，ロンドンの新住所を報じた葉書をボアズへ発送している。彼自身と家族を如何に支えるか，自らの財産――北シベリアの原住民文化や言語に関するユニークな知識――を如何に高く売るかという同じ難題が，彼を苛み続けたのである。

1906年のある時点以降，2回目の長期調査に赴くという朧げな計画が形をなし始める。リャブシンスキー（F.I. Rjabushinskij）が後援するロシア地理協会の調査から声がかかったヨヘルソンは，同調査の隊員就任へ向けて手続きを進めた。1908年8月，リャブシンスキーから契約書を受け取ると，自らの旅の立案を始める。

ヨヘルソンはこの旅を，自らの学術的地位を強化し，財政基盤を確保するための方策と明確に位置づけていた。1908年8月25日，彼はボゴラスへ書簡をしたためるが，後者がボアズのために無給で奉仕することに苦言を呈したあとで，以下のように記している。

> 私の旅に関して，彼（バンパス AMNH 館長――引用者注）は「もしあなたがアメリカ博物館に臨時本部を設置される意向なら，われわれは喜んでオフィスルームなどを提供しましょう」と言ってくれます。これらの調査は私の切り札です。……今や私は著名人並に，予定している旅について至る所から手紙が届きます（Jochelson to Bogoraz. August 25, 1908. RAS–B）。

彼はやる気満々で，調査が成立しないことをむしろ心配していた。「私は出掛けられず……何かほかのことをするようになるのでは，という危惧はあります」（*ibidem*）。つまり，彼はプロの学者として，自らの名声を高めるため調査に赴かねばならないのである。自らの成果を売ることによって，彼自身と家族をよりよく支えるべく，民族学調査に今一度，時間とエネルギーを投資するという判断は，きわめて明瞭にヨヘルソンの通信を通底するモチーフである。

ヨヘルソンは1911年，アリューシャン調査から戻って，サンクト・ペテルブルグの著名な民族学博物館である，クンストカメラの研究員になる。しかしながら，そのポストは，ヨヘルソンがオズボーン宛書簡（以下を参照）に記すように，「一定の勤務年限を経たのちに公共サーヴィスと年金の受給権」を保証するのみで，しかも「無給」であった。加えて，ヨヘルソンはその当時，既に57歳になっており，「下級民族学者」（junior ethnographer）と称されたそのポスト[12]は，当然，彼を満足させるものではなく，彼ほどの名声，階級，年齢を具備した専門家にとっては屈辱的ですらあった。

同じ物語がさらに続く。彼の書簡は，困難な財政状況を訴える苦情で満ち充ちている。彼は全ての収集資料をサンクト・ペテルブルグの民族学博物館に納め，博物館も支払いを保証したにも拘らず，支払いはなされなかった。ヨヘルソン夫妻は当時，蓄えを全て叩いて，レスノイェに小さな一軒家を購入したので，財政的にきわめて不如意な状況に陥っている（Jochelson to Boas. April 20, 1913. APS/NYPL）。

＊　＊　＊

ヨヘルソンは一日たりとも，打開策を探すことを止めなかった。サンクト・ペテルブルグの帝室公共図書館文書庫が所蔵する興味深い文書[13]は，彼が同館で研究職ポストを得ようと努めた事実を物語っている。因みに，同図書館は当時，多くの著名人の避難所となっていた。

だが，ヨヘルソンの主要な頼みの綱が，ボアズとAMNHであったことは言うまでもない。1908年，彼がリャブシンスキー調査に参加するため出立したとき，1901年収集資料の取り纏めが完全には終了していなかったこと[14]が想起さるべきであった。そこで，彼はまず，その作業の継続を提案する。1912年11月23日，彼はオズボーン（Henry Osborn）AMNH理事長宛に次のような書簡をしたためた。

> 私はロンドンで今夏，ユカギール資料をめぐる私の作業を終了させることについて，ボアズ博士と相談いたしました。……ユカギールに関する著作では，宗教と神話，物質文化という，ふたつの部分が未執筆です。資料の取り纏めにはおよそ1年かかります。ジェサップ調査のための私の著作を完成させるに当たり，報酬への言及なしに済ませられるならば，どんなに嬉しいことかと存じます。しかしながら，私の生活は専ら学術的著述に依存しており，ボアズ博士が御提案のような600ドル（年俸――引用者注）では，お引き受けいたしかねます。

私としましては，1,000 ドルかそれ以上が入用です。この手紙を受領され次第，博物館が私と取り決めを結ばれる御意向か否か，御一報いただけないでしょうか。さもなくば，私は……ユカギールの巻は未完のままで……アレウトに関する著作に着手することを余儀なくされましょう。……ジェサップ調査のための著作を選択すべきか，それとも私の新しい著作（彼のアレウト資料に関するもの――引用者注）に着手して宜しいか，御判断をお聞かせくださるよう，お願い申し上げます（AMNH–L）。

12 月 28 日，ルーカス（Frederic Lucas）AMNH 館長が返信。ルーカスはヨヘルソンへ，11 ヶ月間・月俸 150 ドルを提案する。ヨヘルソンはサンクト・ペテルブルグに落ち着いて，彼のユカギール資料に関する著作の執筆を開始した。

1913 年，ヨヘルソン夫妻は首都の北郊レスノイェ地区に小さな家を購入した。その当時，そこにはアカデミー会員や大学教授からなる，小さくて快適なコミュニティーが形成され始めていた（ボゴラス夫妻も同地区に住んでいた）。クンストカメラで正式なポストを得た上に，AMNH からの財政的支援も確保されるに及んで，家計は依然逼迫していたものの，生活は安定したように見えだした。この頃にヨヘルソンはボアズへ，家の購入で蓄えを叩いてしまったため，金欠病に悩んでいると記している（April 20, 1913. APS/NYPL）。

ヨヘルソンはボアズに宛てた 6 月 15 日付の手紙で，近況を次のように伝えている。ヘッジ氏（Mr. Hedge）から連絡があり，同氏は彼の考古学資料を英文で出版したいが，そのための資金が得られるかどうか不明とのこと。神話資料についても事情は大同小異で，ロシア（科学）アカデミーはそれを公刊したいのだが，ヨヘルソンに支払うべき原資がないという。ヨヘルソンは，就中アレウト語の，膨大な原語テキスト集成が手元にあるが，果たして AMNH は，それらを上梓することができないだろうか，とも打診していた（June 15, 1913. APS/NYPL）。

ボアズはボゴラスへ手紙を書き，ヨヘルソンの状況とその資料について単刀直入に訊ねている。ボゴラスの返事は，彼にとって頗る典型的なものであった。彼とヨヘルソンは親しい友人同士であり，またボゴラスは明らかにヨヘルソン家の苦しい家計を承知していたにも拘らず，ボゴラスはヨヘルソンをそっちのけにして，自分自身と自らの資料の売り込みにこれ努め，ヨヘルソンのアレウト語資料については次のようにしたためた。

（ヨヘルソンのアレウト資料は）テキストの数は多いものの，多くのテキストは内容が貧弱です。文法に関しては，彼の資料から多くを期待していないことを告白せねばなりません。……今はエスキモー語テキスト（つまり彼自身の資料――引用者注）を公刊される方が宜しい，と私は考えます。と申しますのも，これらはもっと興味深いものですから，優先されるべきであります。私の考えでは，より重要なものを常に優先し，マイナーなものは後回しになさるべきであります（Dec. 7, 1913. APS/NYPL）。

今日のわれわれは，ボゴラスのエスキモー語テキスト集成（Bogoraz 1949）が，80年後にベルイスランド（Knut Bergsland）によって公刊された膨大で極めて価値の高い，ヨヘルソンの「マイナーな」（と称された）テキスト集成（Jochelson 1990）よりも，遥かに貧弱な内容である事実を承知している。

＊　＊　＊

1914年，第1次大戦が勃発。戦争と2度の革命の歳月には郵便事情が余り芳しくなかった。ボアズとJNPEの英雄叙事詩に登場するロシア人主役たちとの間には，劇的な通信の断絶がある。1915年5月，ヨヘルソンはボアズへ手紙を送り，病を得てドイツで治療中に開戦となり，丸1ヶ月も抑留されたのち，ストックホルム経由で帰国を果たすも，病状は余り思わしくない，と伝えた。1917年2月にはシュテルンベルグがボアズ宛書簡のなかで，自著手稿の進捗状況について詳細に報告した。それ以降は，コレクションに保存されている限りで，1921年9月8日付のヨヘルソン宛ボアズ書簡が最初であり，そこには，夏に郵送された「アレウト人について」と題する論文の抜き刷りに対する謝辞が記されていた。ボアズは，何年もの間ロシアの友人との接触を試みるも徒労であった，とも記している。5年半もの沈黙があったのである。

ヨヘルソンは直ちに返信する。

> あなたからいただいた数行の親切なお言葉が，どれほど私を欣喜雀躍させたかを，あなたは想像できないでしょう。あなたのお手紙は，ボゴラスにもシュテルンベルグにも見せました。私たちは皆，科学アカデミーの人類学民族学博物館に勤めていますから，目下の物質的生活条件のもとではあれ，学術研究が何とか成立しています。私自身に関する限り，ここ数年の窮乏生活は私が最後の調査で収集した資料を取り纏めるのを妨げた，と言わねばなりません。……（Jochelson to Boas. October 10, 1921. APS/NYPL）。

ボアズとのコンタクトを回復したヨヘルソンは，再び，西側へ脱出する機会を探り始める。この時は，どこで暮すべきかという問題に，もはや迷いはなかった。共産党支配下のロシアは，明らかに彼が住みたい国ではなかったからである。

ヨヘルソンは米国への入国許可を入手する可能性について，問い合わせを始める。その当時，共産ロシアは米国と国交を有していなかったので，それは容易なことではなかった。彼はボアズに，この件での支援を要請，手数をかけることを詫びたあとで，以下のように記した。

> 全ての外国がタブーとされている国で，ある種の教養を具える男の抱く悲哀感を，あなたは想像できないでしょう。最大の難関を越え極度の苦痛にも耐えて，わが国を離れる許可を得ることに成功しましたが，その許可を現実化しようと試みるや否や，私たちは国外に至る途上で，鍵のかかった扉と出喰わしたのです（Jochelson to Boas. November 23, 1921. APS/NYPL）。

ヨヘルソンにオズボーン AMNH 理事長へ直訴状を書くよう助言したのは，恐らくボアズであろう。彼がしたためた書状は，自らの状況と意図を頗る明確に表現している。

> 拝啓。私はボアズ教授からいただいた手紙で，私のシベリア研究にかかわる資料にあなたが御関心をお持ちであることを知りました。ボアズ教授には，この点に関して詳細な手紙をお届けする所存ですが，今は失礼をも顧みず，あなたにお願いを申し上げる次第です。ロシア科学アカデミーは私に，米国の幾つかの博物館において比較民族学的研究を実施するよう命じました。私は，1 年間ロシアを離れるための許可はロシア政府から入手しておりますが，米国での居住を可能とする貴国政府の許可を得ることができません。私に対する推薦書をワシントンの国務省へ御提出いただくわけには参りませんでしょうか（Jochelson to Osborn. January 17, 1922. AMNH–L）。

ヨヘルソンは直訴状を次のように締め括った。

> 私は，自ら有するシベリアとアラスカ・アリューシャン関係の資料や手稿を米国へ全て帯同いたす所存で，その一部はそのまま印刷に回すことが可能であります。私はまた，医学博士でもあるヨヘルソン夫人を同伴いたしますが，彼女は目下，膨大な人類学資料の取り纏めに従事しております（*ibidem*）。

AMNH では騒動が出来する。ボアズはいつもながら支援に前向きであったが，ヨヘルソンの出張はどのように支弁されるかが不明であった。ボアズはオズボーン理事長宛の手紙で，「彼がこちらで経済的困難に陥らぬことをわれわれが確認するまでは，（米国入国のための――引用者注）許可を申請しないよう」（Boas to Osborn. February 25, 1922. AMNH–L）助言する。しかるに，彼は同じ手紙のなかで，ヨヘルソンの資料が途方もなく重要である事実に鑑みて例外措置を講ずることも提案，「ボゴラス，ヨヘルソン，シュテルンベルグの各氏が所持する資料の取り纏めに対して，もし博物館が同氏らにしかるべき額の月給を支払っていただけるならば，私がジェサップ調査をめぐって提起します支払いは全て取り下げる」用意がある旨（*ibid.*），したためていた。単刀直入に言えば，ボアズはロシアの友人を支援するため，自らの報酬を返上する意思を表明したのである。

感銘を受けたオズボーンは，ルーカス館長に宛てて次のように記す。

> ボアズ教授からのきわめて寛大な申し出を同封します。彼は今後，一切の報酬なしに自らの仕事を完了し，彼が返上する報酬は，ボゴラス，ヨヘルソンの両氏に対する支払いに回されることに同意しています。キュレーターのウィスラー（Clark Wissler ―― AMNH の人類学担当キュレーター――引用者注）が戻ってきたら，この件を直ちに御措置ください（Osborn to Lucas. March 2, 1922. AMNH–L）。

3 週間後，ウィスラーは以下のように記している。

> 私は，博物館が何をなすべきか求められていると感じています。ヨヘルソンとボゴラスがロシアに留まるとの前提で，あなたは彼らのそれぞれに月額 50 ドルの手当を本年度末まで支給することを検討されたい。彼らがこの研究助成に対してなすべき課題は，ボアズ教授の裁量に委ねるべきことを通知します。……ボアズ教授の提案は折半の原則で受理されるのが，長い目で見てより適切でありましょう。この件については，教授が余りにも寛大に過ぎると考えるからです（Wissler to Sherwood. March 27, 1922. AMNH–L）。

1922 年 3 月 30 日，この一件はオズボーン理事長の手紙で落着する。理事長は，ヨヘルソンがその出張の全期間を賄うに足る資金を有さぬ限り，彼の訪米に協力するのは「賢明でなく……博物館は，この国における彼の滞在を保証すべき立場にはない。したがって，要請のあった許可を確保するための措置は一切取る積りがない」と記している。彼はさらに，ボアズの「寛大な申し出」を評価して，ボゴラスとヨヘルソンがロシアに留まるとの前提で，彼らには当年度末まで月額50ドル（総額で900ドル）を，ウィスラーが提案した通り，折半の原則にもとづいて支払うことに同意する。

このリストからシュテルンベルグが外されたのは何故であろうか。ボアズもまた，そのことがやはり理解できなかったらしく，次のオズボーン宛書簡では，依然として 3 名の助成金受領者が想定されているが如くに，900 ドルを 300 ドルずつに分割することを申し入れ，3 名がそれぞれ果たすべき課題について説明している（Boas to Osborn. May 5, 1922. AMNH–L）。オズボーンはそれに同意する（Osborn to Boas. May 10, 1922. AMNH–L）。

3 名のロシア人民族学者が示した，この申し出に対する反応は区々であった。3 名は何れも，提案された額で，ボアズがそれぞれに課した著作を執筆するという付託を「喜んで受け入れた」。ボゴラスは最も無頓着だったようである。彼は金銭の受け渡し問題をボアズに丸投げして，当時は米国から共産ロシアへの送金手段に選択の余地がほとんどなかったため，それがボアズに多大な負担を強いる可能性には全く配慮していない[15]。シュテルンベルグはもっと思慮深かった。彼は，ニューヨーク在住の友人ラトネル（Mr. Joseph Ratner）氏が，委任状を携えて金銭受理を代行すると連絡した（Bogoraz to Osborn. June 20, 1922. AMNH–L; Sternberg to Osborn. June 20, 1922. AMNH–L）。これらの手紙は何れも科学アカデミーの名が印刷された公用便箋に記されていて，両名がこれらを一緒に執筆したことは，共通する言葉遣いからも明白である。

ヨヘルソンの反応はやや予想外である。ふたりの友人よりも 1 週間早く，また多分彼らとは独立に執筆された手紙のなかで，彼はオズボーンに感謝し，付託を受け入れると述べたあとで，300 ドルの「助成金」へ話題を転じて，「来る 8 月初旬に予定されている私の米国到着まで，それをニューヨークに保管されるよう」（Jochelson to Osborn. June 13, 1922. AMNH–L）要請する。しかし，それに続く次の 1 節は不可解である。

この機会に，ワシントンから訪米許可を得る際の親切な御支援に対して御礼申し上げるとともに，アメリカ（自然史）博物館が私のユカギールの巻の出版を完了され，私のアレウト語とカムチャダール語資料の上梓案件も御検討くださるよう，希望を表明することもお許しください（*ibidem*）。

私はたった今オズボーンの手紙から，「博物館は，この国における彼（ヨヘルソン）の滞在を保証すべき立場にはない」，「要請のあった許可を確保するための措置は一切取る積りがない」，そして彼ら両名がロシアに留まるとの前提のもとで「お金は 1922 年末まで支給される」ことなど，を引用したばかりである。これについて，オズボーンの言辞は明解この上ない。しかるにヨヘルソンは今や，入国査証への支援で彼に感謝し，自らの米国到着まで予告しているのだ。ここには解釈の余地が幾つかある。オズボーンは冷酷で厳格な理事長の役柄を演ずる傍らで，蔭ではヨヘルソンの米国入国を支援していたか，あるいは偶々幸運にも許可が入手できたに過ぎないのに，ヨヘルソンはオズボーンがそれに一役買ったと考えたかの，何れかであろう（私は，後者の方がより蓋然的であると考える）。その上，ヨヘルソンは容易に諦めるような性格でもない。1922 年晩夏（あるいは初秋），彼はニューヨークに到着して博物館の敷居を跨ぐのであった。

＊　＊　＊

1922 年の秋を通して，ヨヘルソンは生活を整え，博物館での付き合いを更新し，有給ポストに就くべく，積極的に行動する。1923 年 1 月，人類学部門のウィスラー主任は，シベリア民族地図の作成のため，ヨヘルソンを 1 年間（1923 年）雇用する許可をオズボーン理事長に申請する。これは明らかに，ヨヘルソン自身がやりたいことと，博物館が必要とするものとの，妥協の産物である。オズボーンは，ヨヘルソンが支払いを受けた JNPE の出版物にかかわる仕事を全て完了したことを確認するとの条件で，月俸 50 ドルの支給を裁可する。ウィスラーは 2 ヵ月後，再びオズボーンに伝える。

ヨヘルソン博士がジェサップ・シリーズの著作を完成させる見通しが確認されぬ限り，あなたが博士に追加業務の委嘱をなさらぬ御意向であることは，承知しています。……ヨヘルソン博士が御自身の部分を仕上げられたとはいえ，われわれは依然として彼の状況を顧慮する必要から解放されてはいない，と感じております。彼はロシアからの難民（ママ）で，数ヵ月後には，博物館が彼のために決めた月額 50 ドルの手当て以外，何らの支援もなくなります。これでは，ニューヨークでの生活は成り立ちません。彼はしたがって，ひどく落ち込んでいますので，われわれは早急に何らかの判断を下さねばならぬ，と痛感しております（Wissler to Osborn. March 19, 1923. AMNH–L）。

この時期のヨヘルソンの手紙も，彼が「落ち込んで」いた事実を裏付ける。彼は，AMNH が自分を受け入れた，まさにそのやり方に失望する。明らかにもっと期待して

いたのだ。多大な努力を尽くして共産ロシアを脱出し，米国への入国を果たした6ヵ月後，彼は再び，――まことに信じがたいことではあるが――ペテルブルグへ戻ることを考え始める。「問題は，米国にとって私は余りにも年を取りすぎていることです。若者のようなアメリカ人……」（Jochelson to Sternberg. 1923. RAS–S）と，彼はシュテルンベルグにしたためる。別の手紙では，たとえ博物館（AMNH）でポストが得られたとしても，彼の雇用が1年を超えることはまず望めそうにないと記し，そのあとで，彼ら（ヨヘルソン夫妻）は早晩，ロシアへの帰国を考えている（Jochelson to Sternberg. March 12, 1923. RAS–S）とも述べている。

ヨヘルソンの状況や心境は，彼自身が祖国へ送った，シュテルンベグルとボゴラス宛の手紙に開陳された内容から読み取るのが最善の策であろう。以下は，シュテルンベルグ宛ヨヘルソン書簡からの1節である。

> あなたの論文を公刊する場所をこちらで見付けるのは不可能です，というボアズの意見には吃驚しますが，直ちに思い出したのは，私のアレウト語資料が（アレウトは米国の原住民なのに）誰の注目も引かないことが判ったとき，私がどれほど失望したか，ということでした。彼らは私に「われわれの学術プロジェクトに参加した隊員たちの手書き原稿が，もう何年も刊行を待っているというのに，どうして，あなたの論文まで引き受けられましょう」と言います。……私たちは間もなく出国を余儀なくされましょう（Jochelson to Sternberg. March 1923. RAS–S）。

同じ手紙で，彼はシュテルンベルグへ，サンクト・ペテルブルグの博物館（Kunstkamera）に自分のポストを見付けるよう要請したあとで，以下のように続ける。

> ウィスラーは今日，私がヤクート・コレクションを記載するとの前提で，8月まで月額150ドルの予算が確保された，と私に告げました。何という破廉恥なやつらだ。第1に，助手の給与ですら150ドルはなく，最低でも200ドルです。そして第2には，8月1日という締め切りは到底守れません（*ibid.*）。

今1通の，さらに以前に書かれたボゴラス宛の手紙では，米国での生活に愚痴をこぼし，彼のカムチャツカ研究で進展がない場合（つまり，そのための費用を博物館が捻出しないようであれば），8月には一家を挙げてロシアに帰国する予定だ，とも記している。彼の妻は気分が勝れず，姪も米国が好きにはなれなかった[16]。ヨヘルソンはボゴラスに，ロシアでの生活条件について教えてくれと書いたあとで，次のように続ける。

> 個人的には，安定したポストであれば，それで満足です。私がここで自分の資料を取り纏めることで得ている報酬は，所詮，ほかの国では高望みに過ぎるでしょうから（Jochelson to Bogoraz. Feb. 6, 1924. RAS–B）。

数ヶ月を経て，安定したとはとても言えないまでも，情況は若干快方へ向かったようである。

> 20 ケ月の滞米中に，私は「ユカギールの宗教と神話」を仕上げ（間もなく博物館から上梓されます），「物質文化」の第 3 部を擱筆しかけていますから，私の 70 歳の誕生日（1925 年 1 月 1 日）までには公刊されることが望まれます。アレウト考古学に関する拙稿も出版社へ送付しました。……私は遂に，シベリアやアムール地方，トルキスタン，コーカサスならびに隣接諸国の民族学に関する，地図付きのハンドブックを 1 年以内に完成させる案件で，アメリカ（自然史）博物館と契約を交わしました。……私は無職の民族学者ですから，その申し出を受け入れる，否，単に受け入れるのではなく，それはひったくらねばなりません。……アパートだけでも 900 ドルかかります。……私の仕事が出版されるという事実に，大いなる満足を覚えます。実際，かなりよい形で 70 歳を迎えようとしています（Jochelson to Sternberg. June 8, 1924. RAS–S）。

1 年後，情況に変化はない。ヨヘルソンは相変わらず生活費が嵩むのをこぼしている。彼の給与も戦前並みとはなったものの，物価は 3〜4 倍に高騰している。専任のポストでないとか，老人で病人でもあるとか，愚痴は止まるところを知らないが，にも拘らず次のように続ける。

> 私は知的で学術的な仕事にしばしば満足を見出し，自分の仕事の出版は，掛け値なしの慰藉をもたらします（Jochelson to Pekarskij. April 25, 1925. RAS–J）。

＊　＊　＊

一方，ロシアからはますます勇気付ける知らせが届く。忘れてならないのは，ロシアで，レニングラードで，また学術界で起きていることをめぐるヨヘルソンの情報が，ほとんどボゴラスからのものであり，しかもボゴラスは，かなり無責任な形で，ソヴィエト・ロシアの生活を薔薇色に描くことも辞さなかった事実である。ボゴラスにはまたそうする理由もあった。彼自身の情況は頗る順風満帆だったからである。彼は，大学での新学部創設にかかわり，学生たちを「民族学的遠足」に送り出し続けた。ボアズとは，ドイツへ赴く計画を相談し，そこで再会する態勢も整えた。彼はまた，共産ロシアでは政治，社会，学界や日常生活のあらゆる局面で，全体主義の統制が強まっていることなど，どこ吹く風と，自らの生活を，功なり遂げた研究者でひとりの自由人の，完璧に正常で健全で順調な生活として描いた。例えば，ボアズ宛書簡では，学部での自らの生活を述べたあとで，こう付け加える。

> 私の裁量に委ねられた資金は 500 ルーブル，すなわち 2,000 ドルです。これらの学生の大方はロシアの中部や北部のさまざまな地方へ出掛け，またシベリアやコーカサス，クリミア

へ赴く者も僅かながらおります（Bogoraz to Boas. June 8, 1924. APS/NYPL）。

彼は引き続いて，ボアズと時を合わせてベルリンを訪ね，ヨーロッパに 2–3 ヶ月滞在する計画を語り，「これら訣別の歳月ののち」のボアズとの再会を控えて，期待に溢れる心情を伝えている。

書簡は全体として「顕示」と誇示を基調としていた。1 語 1 語が，革命前と比べて今が如何に良くなったかを伝えている。彼の「裁量に委ねられた」資金に対する言及は，時代が一変して，仕事を進めるに当たっても，あなたは最早必要でないという，明瞭な暗示にほかならない。書簡はまた同時に，過去 5 年間の変化が，例えば，ボゴラスは以前と同様にベルリンへ赴き，ヨーロッパに好きなだけ滞在――それがあたかも個人旅行であるかのように，そして彼はあたかも，ソ連当局者の前に膝を屈して許可を乞う必要がないかの如くに――できるように，全て好ましいものばかりであるとの印象も与えている。

数年後にヨヘルソンの姪リヂヤ・ブロツカヤ（Lidia Brodsky）は，伯父を慰めるため手紙を送り，彼のロシアへ戻らぬという決断は正しかったことを，今一度確認することになる。つまり，彼女はオデッサ在住の親戚から，次のような挿話を伝える手紙を受け取ったという。ヨヘルソンがこの親戚に郵送した 2 冊の著書のうち 1 冊は，それが原住民の生活を現代の社会構造に合致する形で描いていないとの口実で，検閲官によって没収されてしまったのだ。リヂヤはさらに続ける。

> あなたが米国で今お持ちのものを，こちら（ロシア）では持てないであろうことに疑いの余地はありません。そして，ニューヨークで仕事を持つ機会――あなたはこの機会を今お持ちですし，これからも常に持たれるでしょう――は，あなたの躊躇いや疑いにも拘らず，天秤の針を常にニューヨークへ向けて振り続けるであろうことも，また同様に疑いありません。

そして，話は核心に触れる。

> 全てのお話や約束がボゴラスに由来する点が問題です。彼は（1 語解読不能，「無責任な」か――引用者注）嘘つきです――尤も，彼の嘘の核心が何であるかは皆目見当も付きませんが。彼が自分の着物を全てベルリンで購入することは勿論，なぜあなたの足を引っ張り続けるのかも，説明不能です[17]。……破廉恥が募ると，それだけでもエネルギーと執念の永続的源泉です（L.L. Brodsky to Jochelson. November 24, 1928. AMNH–L）。

ヨヘルソンに帰国を唆したのは，ボゴラスだけでなかった。ヨヘルソンの古い友人で同僚でもあるペカルスキー（Edvard Pekarskij/Edward Piekarski）も，1925 年 6 月 7 日付の手紙で次のようにしたためる。

貴信中では，以下の数行がとても気になりました。「しかし，同時に，私にはまた生活を支える確固たる手段も，専任のポストもなくて，将来が不分明です。老人にとってはこれが酷くこたえます」。ややもすると，あなたにはこう言いたくなります。戻ってきなさい，ここには常にあなたの場所がありますから。それに，われわれがともに過ごした往時に比して，生活も仕事も今は遥かに容易ですよ，と。けれども，そのように軽々しく言えない事情があります。つまり，あなたが米国生活で享受してこられた，自らの仕事が公刊されることの満足が，残念ながらこちらでは確保できません。だが，もしも，あなたの仕事をこちらにいて（米国で）出版するようなことが可能であれば，あなたには是非とも帰国をお願いしたい（Pekarskij to Jochelson. June 7, 1925. AMNH–L）。

上記の引用に続く手紙の１節は，「偉大なシベリア研究者」であるボゴラス，ヨヘルソン，シュテルンベルグの３人に対するペカルスキーの態度，そしてまた後者の３人に関する意見の，興味深い発展を示している。

（……あなたには是非とも帰国を），そして，あなたに当然帰属すべき地位への就任をお願いしたい。それは，何らかの理由で「トリオ」に組み込まれてきた，真摯な民族学者の地位であります。あなたが何とおっしゃろうとも，私はあなたをこの「トリオ」から外しており，他の「2星」があなたから光を借用するのを憎むものであります。最近の観測によりますと，少なくともソ連のふたつの首都では，これら「2星」がその光をますます翳らせています。そして，（シュテルンベルグの――引用者注）アカデミー通信会員への選出も，これを緩和するものではありません。われわれは皆，その代償を承知しているからです[18]（Pekarskij to Jochelson. June 7, 1925. AMNH–L）。

内からの難題――ニューヨークでの不安定な情況――と，外からの難題――ソヴィエト・ロシアにおける幸せな生活を伝えるボゴラスの手紙やペカルスキーからのバランスの取れたアピール――が，ヨヘルソンにとっては耐えがたい圧力となる。彼は帰国を決断する[19]。

＊　＊　＊

ヨヘルソンのソヴィエト・ロシアへの帰国をめぐる物語は，とどのつまり成就しなかったとはいえ，長期にわたるミステリーに満ちた道程である。この物語の事実にかかわる概略は以下の通り。

ヨヘルソンは 1926 年１月，当時の科学アカデミー総裁であるオリデンブルグ（Ol’denburg）へ宛てて私信をしたためる。自らの「期限を超過した米国出張」からレニングラードへ戻る希望を表明した前便（これはボゴラスとヨヘルソンの甥ドムゲルによってオリデンブルグへ届けられていた）に言及したあとで，米国での義務から解放された暁に，彼は正式な伺い書を提出することを約束する（Jochelson to Oldenburg. January 13, 1926. RAS–S）。

ロシア科学アカデミーの反応はきわめて前向きで，ヨヘルソンのためにはMAEのポストに加えて，レニングラード大学での教授職も確保される。ヨヘルソンはロシア帰国を決断したらしく，ボゴラスへ宛てて次のようにしたためた。

> 私がこの国を離れることが決定しています。それぞれのプロジェクトに別途助成を申請せねばならぬのは，全く煩わしい限りです（Jochelson to Bogoraz. May 9, 1926. RAS–B）。

シュテルンベルグへ宛てた以下の表現と比較されたい。

> 私の米国出発は，1927年の夏となるでしょう（Jochelson to Sternberg. September 8, 1926. RAS–S）。

しかしながら，彼はアレウトの著作を完成させねばならず，それ以前の離米はありえぬことを強調していた。

1926年12月，ヨヘルソンはアカデミーから公式書簡を受領，ポストが確保されて，彼の就任を待っていることが通達される。その返事では喜びと感謝が表明されるも，またもや，公式書簡受領の数日前に，彼はヤクート・コレクションの記載に関して，AMNHと契約を交わしたことも付け加える。AMNHの申し出が断れないのは，彼以外の誰もこの作業をこなせず，またロシアまでの旅費とロシアでの当座の出費に備えて，900ドルは当てにせざるをえないからだ，という（Jochelson to Karskij. December 4, 1926. RAS–MAE–b[20]）。

1927年1月，ヨヘルソンはオリデンブルグへ電報を送り，9月初旬のレニングラード到着を伝える。にもかかわらず，このオリデンブルグ宛公電の日付以降，彼の給与が蓄積さるべく，彼はアカデミーがこの日付で自らを正式採用することを求めて，オリデンブルグの許可を得ようと努めている。何となれば，彼は出発前に，自らの財産や書籍を全てアカデミーへ売却するか，あるいは寄贈せねばならぬからだという。彼はまた，ロシア帰国の途上でワシントンやロンドン，オクスフォードの博物館を訪問したいので，そのための費用も必要だとしている（Karskij to Presidium. January 30, 1927. RAS–MAE–b; see also Jochelson to Oldenburg. February 14, 1927. RAS–MAE–b）。

オリデンブルグは，ロシア帰国の正確な日付を明記した申請書の提出をヨヘルソンに求め，アカデミーはそのあとで初めて彼を正式に採用することができると回答する（RAS–Jochelson. March 19, 1927. RAS–MAE–b）。ヨヘルソンは直ちにそれを実行，7月にニューヨークを発ち，9月にレニングラード到着の予定と明記した（Jochelson to RAS. April 10, 1927. RAS–MAE–b）。それと同時に，ボゴラス宛の手紙では蒸気船の就航予定表について訊ねたのち，以下のように付け加える。

私はとても疲れました。一刻も早く船に乗ることばかりを念じています。では，すぐに会いましょう（Jochelson to Bogoraz. April 17, 1927. RAS–B）。

出発日に近くなればなるほど，ヨヘルソンの手紙はますます曖昧なもの言いとなる。6月の時点では，7月16日ニューヨークを出発，9月末頃にレニングラード到着の計画であった（Jochelson to Bogoraz. June 27, 1927. RAS–B）。8月25日，彼はボゴラスへ次のように記した。

あなたの電報を受け取りました。「直ちに出立」と言うだけなら易しいことです。著作のうち2冊は目下，出版社へ引き渡す途上にあります……。今から一月以内の出発は不可能です（Jochelson to Bogoraz. August 25, 1927. RAS–B）。

その5日後，彼はボゴラスへ打電する。

2週間後，ニューヨーク，発つ（Jochelson to Bogoraz. August 30, 1927. RAS–B）。

1927年9月，ヨヘルソン夫妻は，帰国途上で最初の訪問地であるロンドンへ向けて出発する。彼らは依然躊躇しており，1927年10月18日，夫妻は最終決断を下す。彼はボゴラスに宛てて以下の文面の電報を送る。

済まぬが行けぬ。心臓病重篤。あと文。――ヨヘルソン（Jochelson to Bogoraz. October 18, 1927. RAS–B）。

ロシアへの旅は，かくて中止となる。

一月後，ヨヘルソンは依然として「ふたつの椅子の間に座る」，つまり，ロシア・アカデミーから委嘱される形で米国に留まり，レニングラードでのポストも保持する可能性に，一縷の望みを繋いでいる。彼はオリデンブルグへ手紙を送り，アカデミーに正式雇用され，ワシントンやロンドン，オクスフォード，ハンブルグ，ベルリンへ，各地で博物館コレクションを調査するため出張派遣される可能性について訊ねている（Jochelson to Oldenburg）。われわれはオリデンブルグが果たして回答したかどうか詳らかにせぬが，恐らくは，堪忍袋の緒を切らしたのではなかろうか。

＊　＊　＊

問題は，ヨヘルソン夫妻がレニングラードにポストを確保すべく試みたあらゆる努力にも拘らず，ロシアへ戻らぬという選択を行ったのは何故かである（友人たちが彼を支援するため大いに頑張ったことは明らかであり，彼の土壇場での帰国中止は大きな痛手

と考えた筈である[21])。体調を崩したことへの言及は本当であろうし，心臓発作も恐らく起きたであろうが，にもかかわらず，それが唯一の理由であったとは考えられない。

健康問題が帰国を断念させる唯一の理由でなかったことへの第１の示唆は，ヨヘルソン夫妻が彼らの決断を正当化する折の常套手段である，説明過剰である。あるいは私個人の素人心理分析かも知れぬが，旅を中止する唯一の理由がもしも現実かつ重篤の心臓発作であったとするなら，それ以外の理由は全く不要ではなかったか，との所感を抑えることができない。ヨヘルソン夫妻がその当時したためた手紙からの長い引用を参照されたい。

> V.I.（ヨヘルソン）が，心臓疾患のためそちらへ赴けなくなったと打電して以来，長い時が経ちました。……私たちが旅立とうとした矢先で，V.I. は心臓発作に見舞われ，……彼はその儘死ぬのではないかと思いました。……絶望的な情況にも拘らず，私たちはロシアへ赴く意志は持ち続けました。……発作が繰り返されるに及んで，……私たちは恐ろしいジレンマに直面していることを悟りました。ロシアへ行くことも恐ろしいですが，この恐ろしい国に留まることはさらに輪をかけて恐ろしい，ということです。将来は五里霧中，V.I. は６月以来無職です。彼はボアズを訪ねて助けを請い，ボアズも約束してはくれましたが，２度目に会った際，ボアズはボゴラスから手紙が届き，そのなかでボゴラスは V.I. がロシアに戻らなかったことをとても怒っている，と話されたそうです。そして，ボアズは V.I. に対して，もはや以前のように好意的ではなくなりました。私たちは頗る傷ついています。ボアズは果たして，V.I. よりもあなたの方により親しいのでしょうか?!（Dina Jochelson to Bogoraz. November 1, 1927. RAS–B）。

ヨヘルソン夫人はボゴラスに対して，ボアズが彼を高く買っていて，ボゴラスの口添えは大いに有効であるから，ボアズに手紙を書いてヨヘルソンを助けるようお願いしてほしい，と結んでいる。ヨヘルソンは自らの手紙のなかで次のように続ける。

> ザーナの手紙から，私たちが出発の準備を中止するようになった理由をお判りいただけたでしょう。……病気のほかにも，あなたが私に取り組むよう提案された仕事は，私の手に余るものであることも付け加えたいと存じます。御承知のように私はデスク・ワーカーですので，72 歳にもなって講師や管理職を務めることなど，全く思いも及びません[22])。ボアズがあなたの手紙を受け取って以降，彼の私に対する態度が一変したことに気付きました。彼は老齢や病身に同情を示すことは望んでいませんが，……一方では，いまだに私が所持する未加工資料の価値は十二分に承知しており，また彼の裁量下には，研究推進のために費やすべき膨大な資金もあります（Dina Jochelson to Bogoraz, Jochelson to Bogoraz. November 1, 1927. RAS–B. 2 通の手紙が同一の封筒に収められている）。

さらに，ふたつの引用も参照されたい。

……にもかかわらず，私たちはこちらに留まります。これにはたくさんの理由があります。まず第1に，私は今，博物館で仕事を有します。……次には，ボアズがアレウト語テキストに関する研究に留意してくれていることです。……あなたへの手紙に既に記したことですが，私はデスク・ワーカーですから，私の年齢で管理業務や教育活動に時間を浪費して，未加工資料をあとに残すのは，賢明とは申せません。……加えて，レニングラードの厳しい気候は，心臓疾患に苦しむ老人にとって良くありません。さらに加えて，私が長らく慣れ親しんだこの環境から離れることは――私は心臓のことを念頭に置くわけですが――ほとんど狂気の沙汰でしょう（Jochelson to Bogoraz. End of 1927–not later than January 12, 1928, from AMNH. RAS–B）。

私は今も，母国において自らが敬愛する人々の間で暮らしたいと願っています。だが，不幸にして私は今，レニングラードへ行くことができません。ジェサップ調査の当時に私が収集した包括的なヤクート・コレクションを記載し，またヤクートに関するモノグラフも執筆することで，AMNH と契約を交わしました。今年の1月に開始したその作業は，2年を要するでしょう。……私にレニングラード行きを思い止まらせる理由が，もうふたつあります。第1が私の衰えた健康です。……第2は，自分の最晩年を，管理業務や教育ではなくて，収集資料の取り纏めに捧げたいという願望です（Jochelson to Karskij. January 26, 1928. RAS–MAEa[23]）。

ヨヘルソン夫妻が1927年になぜロシアへ戻らなかったかを考えるとき，彼らが「学者にとって等しく住み易い」ふたつの国の何れを選ぶかといった，単純な選択を迫られたわけではなかったことに思いを致すべきである。それは共産ロシアへ，すなわち，ヨヘルソンが1917〜1921年の革命と内戦を通してそこに滞在するなかで，明らかに頗る不快な体験を強いられた国へ，戻るか否かの選択であった。今日のわれわれは，1920年代後期におけるソ連の生活や，その後の経過についても多くを承知しているから，それは容易に判断できることも想起すべきであり，また彼が戻らなかったのは疑う余地なく正しい判断だった，とも断言できる。1928年初頭は，革命を準備した人々がその実現を望んだことが，いつかは革命によってもたらされるだろうという最後の希望が，死滅した時であった。とはいえ，1922年来国外で暮らしてきた者にとっては，1927年の半ばでも，それは決して自明でなかったろう。

では，ヨヘルソンがこの決断を下したのは何故であろうか。また，彼が翻心し，あらゆる努力の末，とどのつまりロシアへ戻らなかったのは，何故であろうか[24]。明白な仮説とされるのは，ロンドンに着いた夫妻が誰かと会い，彼らの死命を制するような事柄を知ったからではないか，というものである。彼らの出会った知人が，その当時のロシアで起きていることを語って，帰国を思い止まらせたのかも知れぬし，新聞で「目から鱗」の記事を読んだのかも知れぬ。これはありうる。彼のもとに友人から届いた手紙においてさえ，ソ連の実情を伝えるヒントは容易に見付けることが可能である[25]。しかしながら，想起さるべきはヨヘルソンの主要目的，ならびに，彼の帰国計画がすべからく，

最善を尽くして彼を助けた友人たちとの個人的なコンタクトに基づいていた，という事実である。

ヨヘルソンの帰国計画における主要な（そして恐らくは唯一の）目的は（そしてまた彼の後半生におけるほとんど全ての動きの主要目的も），「静かな避難所」の探索であった。彼の理想は，自らの包括的なフィールド資料に基づく研究と著述を心静かに進め，彼自身と家族のために経済的独立や，彼の友人や同僚に比して質素ながらも見苦しくない生活を確保することであった。

1927 年の秋までに，ヨヘルソンはこれら全ての条件が事実上失われかけていると見做し始める。過剰に仕事を課されることを慮り，ロシアで何が起きているかについても明確な認識を欠いていた[26]。彼は年寄りで，変化を恐れていた。私の確信するところによれば，彼が拠り所とした最後の麦藁は，旧友シュテルンベルグの死を伝える知らせであった。シュテルンベルグは 1927 年 8 月 24 日に死去しており，ヨヘルソンはその事実をボゴラスから，恐らくは電報か手紙で直ちに知った筈である。ヨヘルソンへ宛てたボゴラスの手紙は所在が明らかでないものの，同じ頃にボアズへ送られたボゴラス書簡には，「その死のあと，私のこちらでの立場は難しくなり，少々厄介なものにさえなりました」（Bogoraz to Boas. October 2, 1927. APS/NYPL）と記されている。その生涯の絶頂期に他界した 6 歳年下の旧友の死は，ロシアに戻った場合の自らの将来（そして彼の仕事の将来）について，ヨヘルソンに今一度の再考を余儀なくさせたに違いない。

＊　＊　＊

ヨヘルソンのその後の人生は，われわれが既に見てきたものとほとんど変わる所がない。彼はニューヨークに戻って，AMNH と今一度臨時契約を交わす。同館はその当時資金を有さなかったが，ヨヘルソンは仲介者であるボアズとともに[27]，個人のスポンサーから研究助成金の獲得に成功している。スポンサーのウォーバーグ（Felix Warburg）は，ヨヘルソンの仕事を支援するとの条件付きで 2,000 ドルを AMNH に寄付したのである[28]。ヨヘルソンの俸給問題が，彼のニューヨーク帰還後 1 週間以内に決着するという，そのスピードぶりには瞠目させられる。ヨヘルソン夫妻は 1929 年の年末まで，ニューヨークで暮らして仕事をしたのちニースへ引っ越し，そこにアパートを購入して，同様な生活を続ける。ヨヘルソンはいつも，仕事に対する支払いを求めてボアズを「突き」続け，彼のために論文を執筆し，健康や老齢，不確かな将来などについてこぼしていた[29]。1933 年，彼はニューヨークに戻り，4 年後の 1937 年に 82 歳で没する。

時が経つにつれて，ヨヘルソンは自分が正しい決断をしたことを，ますます確信するようになる。ソ連にいる同僚との関係はとみに悪化の一途を辿って，ソ連に関する彼の論評も遂には，もろに攻撃的で嘲笑的なものとなるに至る。

あなたは米国の新聞を御覧でしょうから，ソヴィエト人の国として知られる蝮の巣で何が起きているかは，勿論御存知でしょう。私たちはトイレに行くとき，「ボリシェヴィキー」の許へ赴くと言います。御覧の通り，彼らは私たちによって大いに尊敬されています（Jochelson to Lydia Domger. May 8, 1931. AMNH–L）。

ソ連の学術機関がボゴラスの支援を受けて私を搾取するやり方を，あなたはお好きですか。私は彼らのためにあまた執筆したのに，代償としてほとんど何も受け取っていません。……これらソヴィエトの詐欺師たちには一切応えないことにしました（Jochelson to Lydia Domger. September 13, 1931. AMNH–L）。

ユカギールとアレウトの親族体系に関する論文の執筆を依頼する，あなたとヴィンニコフの手紙を落掌しました。私は無論，必要な資料を全て持ち合わせておりますが，稿料をドルで受け取れる場合に限り，執筆に同意します。……私は（ハバロフスクの百科事典の 1 件[30]以降）今に至るまで，ソ連の出版社からは，ある 1 冊に支払われた 3 ルーブルを別にすると，自分の仕事の対価としては，びた 1 文いただいておりません。……もう本は結構です。老人の私には「おあし」が必要です（Jochelson to Bogoraz. September 19, 1931. RAS–B）。

＊　＊　＊

人の名前が有名であればあるほど，名前の背後にある人間性は看過される傾向がある。偉大な人物は人間でないとされ，少なくともその人間である度合いは，われわれ凡人よりも遥かに低いと考えられている。学術界における過去の著名人は，ひたすら学術に邁進して，人類の福利にかかわる知識の獲得という栄誉以外は決して追い求めない……と期待されている。本稿では，御本人の観点からは途方もないものを求めたことはなく，単に自らの仕事をして控えめな対価を受け取ることを願ったに過ぎない学者の，生涯を概観することを試みた。20 世紀の最初の三分期は，ドラマティックな時代，幻滅の時代，磐石に見えた多くの理想が挫折した時代であった。これらの理想とともに，過去の象徴的な人物――ロマンティックで，研究に全身全霊を捧げた，この世のものとは見えぬジュール・ヴェルヌ型学者の象徴的人物――も姿を消した。学者たちは突如として，別世界にいる自分を見出した。それは，知識のための知識に対する興味を喪失したプラグマティズムの世界であり，「自らの仕事をする」だけの学者には支払いを頗る躊躇する世界である。このような新世界では，学者が科学することによって「生計を立てること」がますます難しくなった。われわれは，このイデオロギーの変化の犠牲者たるヨヘルソンが，「静かな隠れ家」を求めて国から国へ，都市から都市へと「ジャンプ」を重ねて，――挫折するか，あるいは少なくとも，上首尾に跳べたとはとても言えない姿を見てきた。

アンリ・ポアンカレは 1908 年，「科学者は自然を研究するが，それは役に立つからそうするのではなく，彼に喜びを与えるからであり，また自然が美しいから，それは彼に

喜びを与えるのだ」と，その著名な著作『科学と方法』に記している。これは勿論，19世紀のみならず21世紀およびそれ以降にあっても，――成るほど戦争や革命で多忙な世界はしばしば，この自明の真理の認知や承認をし損ずるとしても――真実である。

［英文原稿から井上紘一訳］

注

1) 本稿は，実際のところ資金調達，つまり，資金の欠如，資金を確保するためのさまざまな試み，研究活動の資金調達に対する依存をテーマとしている。ここではまた，米国とロシア人学者との金銭関係も取り上げられる。こうした関係には長い歴史があるわけだが，以下の物語は，かかる歴史における最初期の1事例である。

2) この研究は，フルブライト奨学金（1993年11月–1994年2月），ならびにニューヨークのアメリカ自然史博物館（AMNH）との公的な研究協力によって可能となった。このプロジェクトの成果の幾つかは既に公刊されている（Vakhtin 2001参照）。就中，Igor Krupnik と Anna Sukhorukova には，両氏から賜わった重要な助言や助力に対し，この場を借りて謝辞を申し上げる。

3) 通信の一部は，サンクト・ペテルブルグの科学アカデミー文書館に収蔵されている（収蔵館はRAS，ボゴラス・コレクションをB，ヨヘルソン・コレクションをJなどのように，それぞれ略記する）。その他の部分はニューヨークとフィラデルフィアに保管されている。ボアズの公務通信の原文は，フィラデルフィアのアメリカ哲学協会が所蔵するものの，そのマイクロフィルムは多くの場所で閲覧が可能で，私はニューヨーク公共図書館蔵（APS/NYPLと略称）のコピーを利用した。JNPE関係の文書や通信を収蔵するその他の機関は，当然ながらアメリカ自然史博物館，すなわちその図書館と Special Collections Division（略称は AMNH–L），ならびに人類学部門文書庫（同 AMNH–DA）である。

4) 1924年，シュテルンベルグは科学アカデミーの通信会員に選出されている。

5) 1924年6月20日，ボゴラスの根強い活動や努力が実を結ぶ形で，ソ連共産党中央執行委員会幹部会は，「北方委員会」の名でむしろよく知られる「極北諸民族を支援する委員会」の創設を採択した。同委員会は政府の高級官僚や学者で構成された。委員会の管掌業務は，北方における経済発展に必要な方策の研究・策定・実施，北方少数諸民族の生活や欲求に関する情報の収集，彼らの歴史・文化・日常生活の研究推進，彼らを搾取から守るために必要な施策の研究，北方における行政・司法制度の基本原則の策定であった。

6) RAS Archives, *f.* 2, *op.* 1-1926, *pred.* 11, *l.* 111 — RAS Materials; RAS Archives, *f.* 135, *op.* 1, *pred.* 2, *l.* 510 — Materials of the Institute for the Study of the Peoples of the Soviet Union.

7) これを含めて多くのヨヘルソン書簡は，適切に翻訳することが難しい。私の英訳は，その幾分情緒的で素朴なスタイルを伝えるのに成功していない。

8) ヨヘルソンが米国にいる間はアカデミーにポストを確保することが難しい，とシュテルンベルグは伝えていた。

9) ここでヨヘルソンが仄めかしているのは，1901〜1902年にロシアの高等教育改革を試みた，当時の文部大臣ヴァノフスキー（Petr Semenovich Vannovskij, 1822–1904）の一件である。ヴァノフスキー文相は改革案を国家評議会へ提出したものの，皇帝が自ら却下してしまった。ヴァノフスキーの演説や公刊文献で幾度か使われた「衷心からの配慮」という文句は，不完全な改革や無益な好意を指すシンボルとなった。

10）1905年にはボアズとボゴラスの間で注目に値する手紙の遣り取りがあり，学術と政治の対比的評価をめぐる各自の態度を，そこに垣間見ることが可能である。ボゴラスは1905年4月6日付の手紙で，チュクチに関する著作が遅々として進まぬことを詫びて，以下のように続ける。「……それぞれの国家や国民にとって，このような時代が数世紀に1度しか来ないことは，御理解いただけるでしょう。……われわれロシアの文士はいまだ重要な役割を誰も果たしていません」（Bogoraz to Boas. April 6, 1905. AMNH–DA）。2週間後，ボアズは次のように反論する。「私は，昨今の興奮や，あなたが学術研究に専念することの困難は十分に了解しますが，もし今日のような出来事が1世紀に1度しか起こらぬとしますと，ボゴラス氏によるチュクチ研究は未来永劫1度しかありませんから，私に言わせるなら，御自分の研究成果を私たちへ伝えてくださることは，学術に対する御自身の責務であります」（Bogoraz to Boas. April 14, 1905. AMNH–DA）。

11）Jochelson to Boas. September 22, 1906. APS/NYPL. 以下の経緯も参照されたい。「スイスで出会ったクレメンツは，ロシア行きを暫く見合せるよう，忠告してくれました」（Jochelson to Boas. October 24, 1906. From Charlottenburg. APS/NYPL）。その1ヶ月後には，1月の訪露計画に言及し（Jochelson to Boas. November 22, 1906. From Charlottenburg. APS/NYPL），数ヵ月後にも「悲しむべき国内情勢にも拘らず，ロシアを訪ねることを嬉しく思います」（Jochelson to Boas. February 25, 1907. From Charlottenburg. APS/NYPL）と記している。

12）RAS Archives, *f.* 135, *op.* 1, *pred.* 2, *l.* 510 — Materials of the Institute for the Study of the Peoples of the Soviet Union.

13）ロシアの著名な旅行家で，地理学者にしてロシア地理協会副会長のセミョノフ＝チャンシャンスキー（P.P. Semenov-Tjan'shanskij）が，コベコ（D.F. Kobeko）公共図書館長宛に執筆した推薦状（April 11, 1912: file 65, "On Mr. Jochelson's service"）。セミョノフは，ヨヘルソンの民族学者としての活動とその研究成果について述べたあとで，次のように記している。「過酷な条件下のフィールドで孜々として働いたヨヘルソンは，その年齢のゆえに，もはやフィールドワークを続けるのに十分な体力がなくなったため，デスクワークに専念することを希望しており，ましてや極東諸部族の文献学や民族学に関して，彼は自ら収集した膨大な量の資料を有してもいるから，その希望は一入である」。

14）このことにボアズはかなり不満であった。ボゴラス宛の書簡（1907.11.27. RAS–B）では，ヨヘルソンがカムチャツカへ赴く資金を得たことに祝意を表しながらも，自分との共同作業を続けることができないのは頗る遺憾だ，と記している。数ヵ月後，ボアズはボゴラスへ，「ヨヘルソン氏の新しい調査が，作業の全体計画を深刻に阻害していますので，彼の資料を纏めるに当たっては，あなたとシュテルンベルグ氏の御支援を仰がねばなりません」とも伝えている（1908.03.31. RAS–B）。

15）「彼らが受け取るお金はどの道，食料のために支出される筈だから」，ボアズは結局，食品交換手形をボゴラスとシュテルンベルグ宛に送付するという方法を採用した。

16）同書簡には，「忌まわしい米国から衷心よりの挨拶を送ります。伯父は，私や伯母がアメリカを罵りだすと腹を立てますが，ここは全くもって厭わしい国です」と記された，姪の「追伸」が付されている。

17）彼女が何について語っているのか不明であるが，ボゴラスがどこかで，ロシアの生活が良くなっていることを示してヨヘルソンを口説くため，ソヴィエト・ロシアである種の奇抜な衣装を買った（当時のロシアでは不可能であった）と虚言を弄したことであろうか。

18）ところで，1927年にはペカルスキーも科学アカデミー通信会員に選ばれている。

19）ヨヘルソンの帰国を促した動機は明らかに，より良く暮らせる場所を見付けたいという願望

であった。つまり，自分の望むことが自らの能力を駆使して行え，その成果に対してはしかるべき代償が受け取れるような場所である。ヨヘルソン夫人はペカルスキーへ「私の考えでは，人が暮らすためならロシアの方が容易ですし，そちらではこちらほど働く必要もありません」（Jochelson to Pekarskij. June 4, 1926. RAS–J）と記していた。

20）RAS-MAE-b: *f.* 2, *op.* 1-1927, *ed.* hr. 15 — MAE Papers.

21）以下は，ボゴラスがこの 1 件をめぐってボアズへしたためた手紙からの引用である。「W. ヨヘルソンは二日前，土壇場になって次のような電報を寄越しました。《済まぬが行けぬ。心臓病重篤。あと文。》彼は 72 歳ですから，どのような病気に襲われても不思議ではありません。にもかかわらず，私には突然としか思えぬ彼の心変わりの所為で，私の立場は目下，決して良好とは申せません。私は彼のために全てを最善の条件で整えました。アカデミーでの彼の俸給は 7 月から支給が始まりますし，……仕事の量も，彼自身が選択して同意を与えた範囲内のものです。私は今，彼の拒絶が頗る遺憾でありますが，それ以上に彼の病が，もしもそれが電報で言って寄越したほど重篤であるならば，頗る遺憾です（Bogoraz to Boas. October 13, 1927. APS/NYPL ——下線は引用者）。

22）ヨヘルソンは 3 年前，ボゴラスの学生たちにシベリア民族学の講義を行うことに対する，自らの意欲を明言していた（Jochelson to Bogoraz. December 12, 1924. APS/NYPL）。

23）RAS-MAEa: *f.* 142, *op.* 1-1928, *ed.* hr. 3, *l.* 105 — MAE Papers. カルスキーは当時の MAE 館長。

24）ヨヘルソンの「翻心」は全くなかった，つまり，現実には彼が帰国のことを真剣に考えたことなどついぞなく，彼にロシア・アカデミーのポストを確保すべく奔走した人たちを，彼はひたすら騙しつづけたと語ることも，無論可能ではある。しかしながら，私はこれが真実とは考えない。既述のように，彼が決断の人であったことは決してなく，重要な判断に臨んではいつも優柔不断であった。彼はまた，直情径行型の正直人間でもあったから，そのような狡猾さとは恐らく無縁であったろう。

25）以下のペカルスキー書簡を参照されたい。「私はしばしば，博物館でさまざまな問題に遭遇するたびに，あなたとヂーナ・ラザレヴナのことを思い出し，……それらの論争ではあなた方が私に与してくださるであろう，との結論にいつも到達します。この結論は，あなた方が道徳律を完璧に保持され，語の最善の意味におけるヨーロッパ人でおられたし，今なおヨーロッパ人でいらっしゃるとの確信に基づきます。私が申し上げたいことを十全に説明するには長い時間を要しますし，たとえどんなに努めても，長大な手紙をしたためてすら，言い尽くせないことがたくさん残ってしまって，あなた方に深い悲しみをもたらすこととなりましょう。私がかつてその欠点にも拘らず愛し，また尊敬してきた人たちの道徳的堕落を見るにつけて，道徳的苦悩に苛まれるとだけ申しておきましょう」（Pekarskij to Jochelson. June 7, 1925. AMNH–L）。

26）シュテルンベルグ宛書簡（1927 年，日付なし）のなかで，彼はボゴラスから手紙が届いたこと（そしてボゴラスは「今や凄まじいムードにある」こと）を記したあとで，新聞で見る限りロシアで起きていることは判然としないと付け加えている（Jochelson to Sternberg. 1927. RAS–S）。

27）ボアズは 1927 年 12 月，自分がヨヘルソンのためにどれほど尽くしたかを訴えるボゴラスに対して，明らかにそれに応える形で「私にとっては，ヨヘルソンもあなたも同様に大切です。ここ数年間，彼が妥当な収入を確保するのは，途方もなく難しいことでした」と記し，「今では全て落着しています」と続けている（Boas to Bogoraz. December 15, 1927. APS/NYPL）。

28）以下の書簡参照。 Jochelson to Boas. November 3, 1927. APS/NYPL; Boas to Warburg. November 4, 1927. APS/NYPL; Warburg to Sherwood. November 7, 1927. AMNH–L; Lucas to Warburg. November

9, 1927. AMNH–L; Lucas to Warburg. November 9, 1927. AMNH–L; Warburg to Sherwood. November 10, 1927. AMNH–L.

29）以下の書簡参照。Jochelson to Boas. November 22, 1931. APS/NYPL; Jochelson to Boas. April 29, 1932. APS/NYPL; Jochelson to Boas. February 28, 1933. APS/NYPL; Jochelson to Boas. July 31, 1934. APS/NYPL.

30）（1927 年にソ連極東の行政府が企画した）地方百科事典を編集刊行するプロジェクト。ヨヘルソンはそのために，数篇の論文執筆が依頼されたが，百科事典は上梓されなかった。

参考文献

Bogoraz

1949 В.Г. Богораз, *Материалы по языку азиатских эскимосов*（アジア・エスキモー語資料）. (И.С. Вдовин, ред., составители Г.А. Меновщиков и Е.С. Рубцова). Ленинград: Учпедгиз.

Jochelson, W.

1990 *Unangam Uniikangis Ama Tanuzangis: Aleut Texts and Narratives. Collected in 1909–1910 by Waldemar Jochelson* (edited by Knut Bergsland and Moses L. Dirks). Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

Vakhtin, N.

2001 Franz Boas and the shaping of the Jesup research in Siberia. In I. Krupnik and W.W. Fitzhugh (eds.), *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1897–1902*, pp. 71–89. Washington D.C.: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.